

終わりの教え

マタイ福音書 25:31-46

（そのとき、イエスは弟子たちは言われた。）「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。

『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気の見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気見舞い、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。この最も小さい者の

一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」

先週はちょっとずらして話をしましたが、今週のテキストはずらしようがないですね。終末、この世の終わりに関する聖書のテキストです。このイエスが最期の説教として語った（マタイ福音書では25章以降は十字架への道行きとなる）教えは解釈がわかれています。教会の歴史の中でも「終末、おわりの時」に関する教えは微妙な問題なので多くの解釈が生まれ、また異端とされてきた経緯があります。

世の終わりの時にはキリストが王としてやってきて、民草（たみくさ）を裁く、ヤギさん、ヒツジさんにわけるとテキストにあります。また、その分ける基準が明解とはなっていません。ヒツジ組みとヤギ組みは双方とも同じセリフをいっていますが、それぞれに納得のいく説明なり証拠なりが示されるわけではなく、キリストが決めた、二つに分けたからそうなんだ、ということです。

だからこそ、これはどういう意味だ、これはこうだと解釈が分かれてきて、いろいろな理屈が生まれてきます。そのうちの一つを紹介します。

シオニストと呼ばれているキリスト教のある宗派では礼拝説教でこんな解釈を展開します。（以下ロゴス・ミニストリーの教会礼拝説教から引用）

25:31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。

これは、イエス様が再び地上に戻られる時の光景です。イエス・キリストは、十字架の上で私たちの罪のために死なれ、三日目によみがえり、そして天に昇られました。今は、天地を創造された父なる神の右の座に着いておられます。そして、この世の終わりの時にこの方は戻ってくると約束されました。

再び戻ってこられることについて、主は弟子たちに、世界がこれからどうなっていくのかについて語られました。その言葉がことごとく、人間の歴史の中で実現し、

実に現在に至るまで実現しつつあります。オリーブ山のところから、荘厳な神殿をイエス様は見ておられましたが、それは石が積み上げられたままで残ることはないと言われましたが、果たして約四十年後（西暦70年におきたエルサレム陥落をさす）にそうになりました。

そしてイエス様はこう言われました。「**民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、大地震があり、方々に疫病やききんが起こり、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現われます。（ルカ 21:10）**」前世紀から、私たち人間は特別な時代に入りました。世界的に国が国に、民族が民族に敵対して戦争をするようになりました。二つの世界大戦を経験して、それ以降、核戦争の危機の時代に入りました。今もイランが核兵器を開発中で、イスラエルとアメリカに対して実際に使用しようと準備しています。

そして大地震がある、とイエス様は言われましたが、前世紀に起こった一千人以上の死亡者を出した大地震は、その前の歴史にある同じ規模の大地震の数を加えても、もっとさらに多いと言われています。去年（2011年のこと）だけを考えてみてください。ニュージーランドで地震が起こり、世界がいったい何なのだろうと不思議がっている矢先に、世界最大規模の地震を私たち日本人は経験しました。トルコでも地震が起こりました。そして洪水が世界各地で、これまでにない規模と頻度で起こりました。これらはすべてイエス様が予告された通りです。

今は地上で異変が起こっていますが、イエス様は天における異変が起こると予告されています。私たちは、それはまだ見ていませんが、これから起こることでしょう。そしてイエス様は、ユダヤ人に対して大きな迫害が来ることを予告されました。エルサレムにおいて、「荒らす憎むべき者」がユダヤ人神殿の中に入って、自らを神であると宣言します。そしてユダヤ人らを虐殺すべく、彼らを追っていきます。しばしば、ユダヤ人は「世界の日時計」と呼ばれます。ユダヤ人が今、どのような状態にいるかによって、世界がどうなっているかが分かるというものです。1948年にイスラエルの国が建国されました。そして1967年にエルサレムがイスラエルの主権下に入りました。これは、神が散らされた世界のユダヤ人を集めるという約束の通りであり、驚くべき預言の成就ですが、イエス様はまた、ユダヤ人が最も大きな試練の中に入ることも前もって語られました。つまり、第二のホロコーストが起こる、ということです。

ユダヤ人はその時に絶滅の危機に瀕します。荒らす憎むべき者あるいは反キリスト

は、世界の軍隊と共にユダヤ人を滅ぼそうとします。けれども、聖書によると、その時に主イエス・キリストが戻ってこられます。彼らを救うために天から戻って来られます。世界の軍隊は神とキリストに対して戦いを挑みます。「ハルマゲドンの戦い」と呼ばれるものがそれです。けれども、イエス様はご自分の口から出てくる剣をもって、これらの軍隊に戦われます。そして、大きな天変地異が起こりますが、キリストが地上に足をつけたときに、世界は一変して、この地上は神が初めに考えておられたとおりの、回復し、完全な状態に戻るのです。

今、イスラエルの国はイランからの核攻撃を受ける危機に瀕しています。彼らは打たれる前に各施設を破壊することで先制攻撃する選択も残していますが、そうしたら世界が一斉にイスラエルを非難することでしょう。イスラエルはさらに孤立します。これらのことも、イエス様が予め、紀元30年頃に弟子たちにお語りになったことです。（云々とあれはこうだ、これはこういう意味だと続く）

これを狂信だと決め付けることもできません。また、理性をもって判断しなければいけませんね、という説教も有効ではありません。なぜなら人それぞれに理性のていどは違うからです。するどい理性の持ち主もいれば、ちょっとぬるい人もいます。でも、ちょっと危ない、とか、変だな・おかしいよという判断なら理性とは別のところでできるでしょう。だからといってそれが正しいとは限りません。

算数の答えはひとつだけれど、国語の答えはひとつとは限らない、これはたいていの人の常識でしょう。答えはひとつじゃないといやだ、なんとかひとつにしたい、それが高じてくると、つまり程度がひどくなると「あれはこうだ、これはこういう意味だ」という考え方につながります。

信仰と信念の違いについてある人はこういいます。卓見だと思うので紹介します。

信仰はキリスト教でもユダヤ教でもイスラム教でも「他者を歓待することにおいて表される」とされていた。この理解からすれば「信仰」と「信念」は正反対なものになる。「信念」が相手を拒絶するものであるのに対して「信

仰」は相手を受け入れるもの、「信念」が相手を支配するものであるのに対して「信仰」は相手に仕えるものだ。

25:40 そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

イエスのことばは愛の実践を奨めています。このことばに解釈を加えず、イエスの教えとして終わりの時への備えとし、このイエスのことばを自分のものとする、易しいことではないのですが、これを実践していく他に道はないようにわたしはおもいます。

パウロのことばできょうの終わりとします。

それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。一コリ 13:13
